

4 旧石器について

旧石器発見の意義と石材の特色 本遺跡での旧石器出土は、函館周辺地域においては、隣接する石川1遺跡に次ぐものである。しかし、それは単に隣接遺跡における共通性として処理されるべきものではなく、周辺地域での旧石器時代遺跡のより多くの存在の可能性を示すものである。

北海道南西部の旧石器時代の遺跡については、かつて分布状況を整理した（**石川1** 蔵文化財センター 1984a）が、その後、昭和61年度に石川1遺跡（**新道4** 蔵文化財センター 1988a）、木古内町新道4遺跡（**湯の里4** 蔵文化財センター 1988b）が、そして、昭和62年度に本遺跡が調査され、新たな展開が生まれつつある。また、これら三遺跡に、すでに調査されている知内町湯の里4遺跡（蔵文化財センター 1984b）を加えると、津軽海峡遺跡群とでも呼ぶことができ、北海道と本州の旧石器をつなぐ、キーポイントとなるものと考えられる。四遺跡はいずれも現海岸線より数 km 内陸に入った河川の右岸に位置する、という共通性があり、その状況は、海との「非親和的」な「現海岸線から一定距離内陸部」に入った「孤島状の分布」という全国的な細石刃文化の遺跡の立地傾向（鈴木 1985）と一致する。

石材の特色 一方、石器類に利用されている石材をみると、いずれの遺跡でも、頁岩やめのう質頁岩などの在地産と考えられるものが主体で、原石の色や模様の特徴からある程度の母岩識別が可能で、本遺跡を含め、石川1、新道4遺跡などでも多数の接合資料が得られている。本遺跡の石材の主体はめのう質頁岩であることはすでに述べたが、それらはいずれも原石の状態で遺跡に持ち込まれ、剥片剥離作業が行われている。隣接する石川1遺跡においても、めのう質頁岩は原石の状態で遺跡に持ち込まれ、尖頭器の製作などが行われている。また、両遺跡の縄文時代の住居跡からもめのう質頁岩を利用したやり先またはナイフの破損品やその製作剥片などが出土している。以上の状況から、めのう質頁岩は桔梗2・石川1両遺跡よりそう遠くない場所に原石採取地が考えられる。しかし、遺跡の直面する石川および函館市内や七飯町南部の地域では、類似する原石を発見することはできなかった。

先の四遺跡のうち湯の里4、新道4、石川1の三遺跡では、明らかに持ち込みとみられる**黒曜石**製の石器が出土しているが、本遺跡では全くみられない。本遺跡は他の三遺跡に比べ、出土点数が少なく、調査も部分的であるため単純に比較することはできない。しかし、他の三遺跡がいずれも細石器を主体とする石器組成であるのに対し、本遺跡では細石器が全くない、という石器群の相違が反映しているとみられ、それらは年代差と関係する可能性がある。（長沼 孝）

剥片剥離の方法とナイフ様石器 KSb-1からは、ナイフ様石器19点、ナイフ様剥片15点、剥片774点、石核17点が出土した。これらは接合作業の結果、13個の母岩別資料が抽出され、うち8個は原材の大きさ、形状が確認できるまでに復元された良好な資料である。ここではそれら8個の母岩別資料をもとに剥片剥離の方法とナイフ様石器の特徴について述べる。

剥片剥離の方法は、以下のように分類される。

I 類 I類：剥片を石核素材とするもので、背面の礫皮面ないし前段階の剥離面を打面とし、打点を横に移動させながら連続してその主剥離面から剥片を剥取している。残核は断面がレンズ状の形態をなすもので母岩別資料10の個体別資料 A, B, C がこれに該当する。母岩別

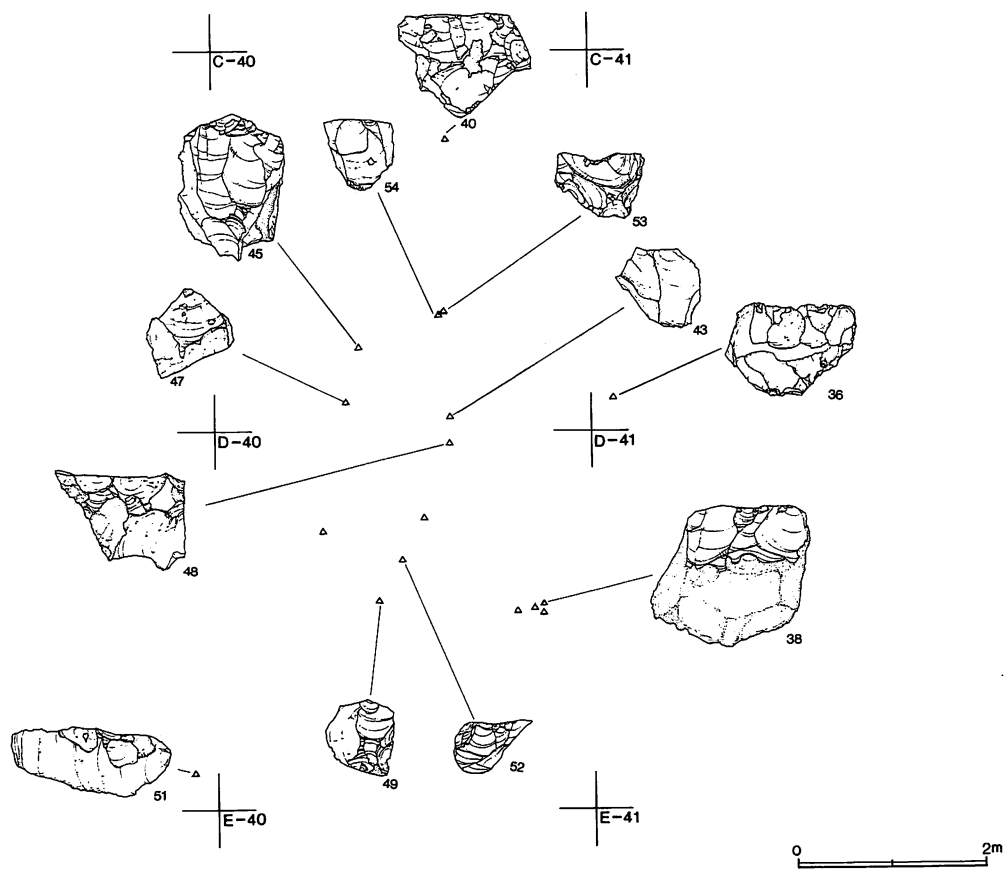
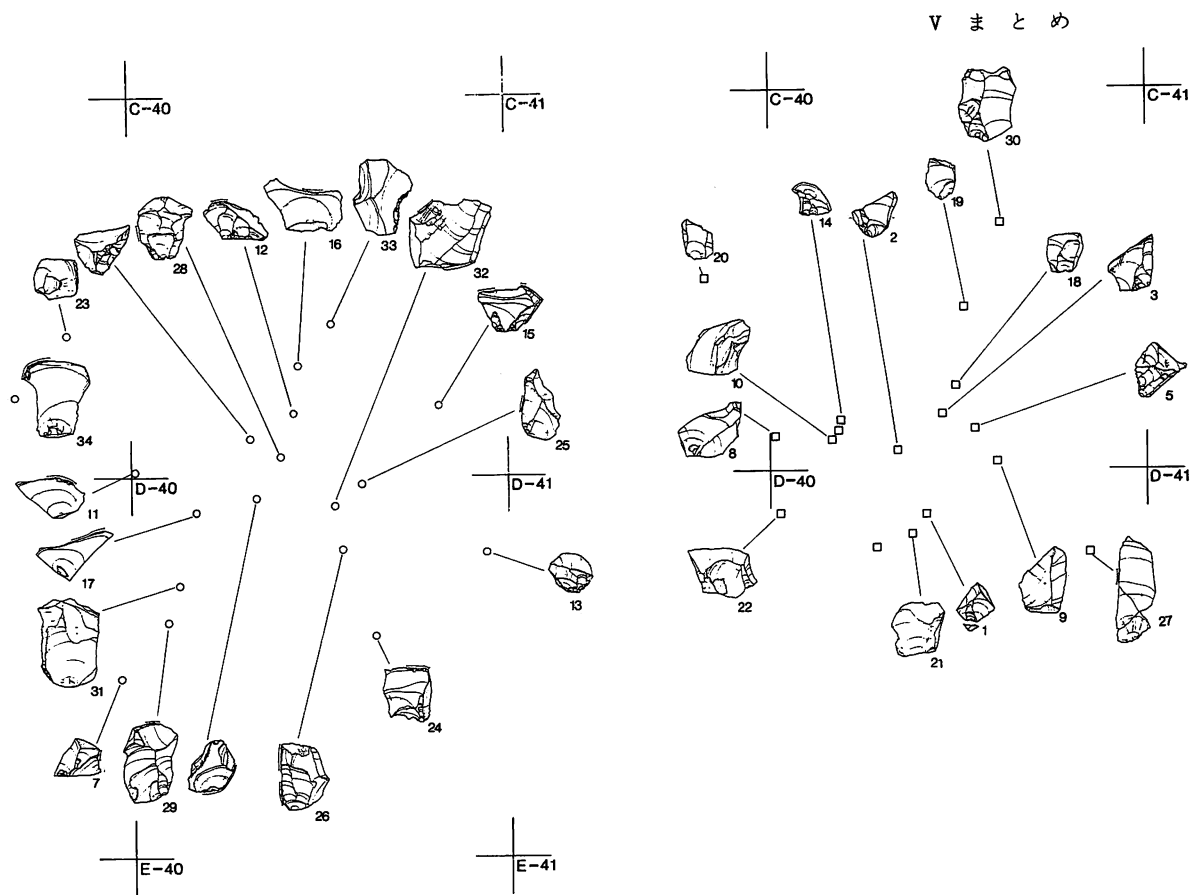


図 V - 8 ナイフ様石器・ナイフ様剥片・石核の分布

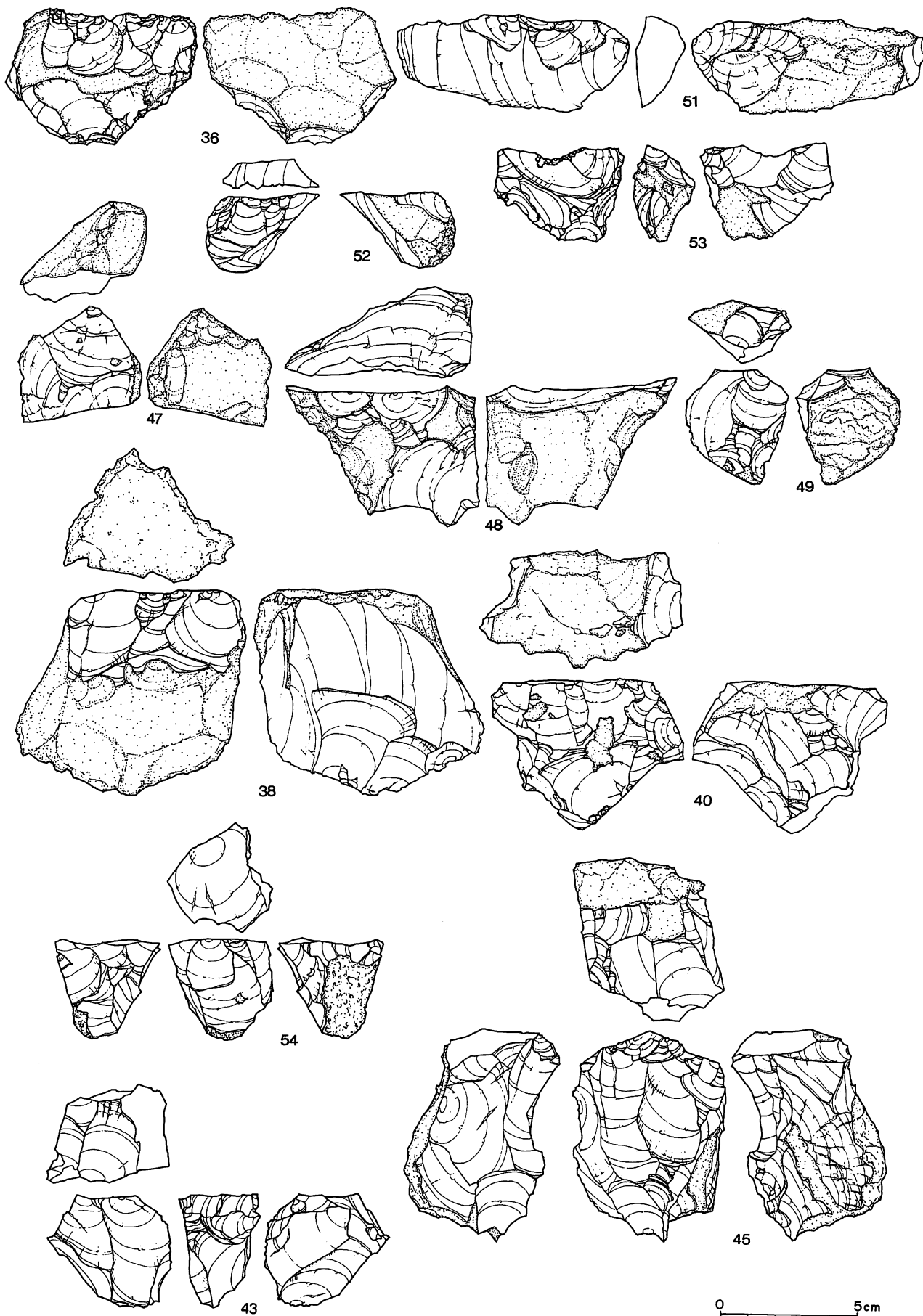


图 V - 9 石核集成图

資料6は礫が素材となっているが、剥片剥離作業はポジティブな面でおこなわれていることから、このグループに含まれるものと考えられる。

Ⅱ類：礫または分割礫を石核素材とするもので不規則な打面転位がおこなわれるもの。礫の形状に応じて打点移動の方向が異なる a, b の2種類がある。 Ⅱ 類

a 広い平坦な礫皮面がある角礫を素材とするものでおもな剥片剥離は礫皮面または分割面を打面とし、打点を横に移動させながら連続して剥片を剥取している。剥片剥離の直前に頭部調整がおこなわれる場合があり、加撃は平坦な面が確保されれば2方向以上からおこなわれている。残核は断面が三角ないし台形状の形態をなすもので、母岩別資料2・8と3の個体別資料A, Bがこれに該当する。母岩別資料2は分割面からも剥片が剥取されており、Ⅰとの折衷的な要素がみられる。 頭数調整

b 断面が三角をなす礫を素材とするもので、打点の位置や移動のありかたから剥片剥離は3段階に分けられた。打点の移動がa類と異なり後退もしくはジグザグ状におこなわれているのが特徴である。母岩別資料7が該当する。

Ⅲ類：礫または分割礫を素材とし、打面と作業面を交互にかえるもの。母岩別資料1・5と3の個体別資料Cがこれに該当する。残核にはすくなくとも3方向以上の剥離面がみられ、サイコロ状、角柱状の形態である。母岩別資料1・5は両接打面によって剥片剥離がおこなわれている。 Ⅲ 類

Ⅳ類：分割礫を素材とし、打面を次々に転位するもので母岩別資料10の個体別資料Dが該当する。 Ⅳ 類

これらは母岩別資料10にⅠとⅣが、母岩別資料3にⅢとⅡa類がみられるように分割という過程を介在させて2つ以上の方法が一母岩に並存する場合があり、それぞれが独立したものではなく相互に関連性をもった剥片剥離技術であると言える。また、ごく一部のものに頭部調整がみられる以外には石核調整技術をもたないこと、得られた剥片は規格性が乏しく、石刃技法とは大きく異なる点がⅠ～Ⅳ類に共通することとして指摘される。

ナイフ様石器は微細剥離のあるものと、二次加工のあるものに分けられた。微細剥離のあるものは、大きさ、形状が多様多様であり、微細剥離の位置には一定の傾向はみられない。二次加工のあるものは5点出土しているが、このうち母岩別資料10から連続して取られた4・23と13は大きさ、形態、素材の用い方から台形様石器の一種と考えられる。これらは長さ、幅ともに3cm以下で、長幅比が1に近いものである。図V-10には図示したすべてのナイフ様石器、ナイフ様剥片の長さと幅をグラフで表わした。これによると4・13・23の素材と考えられるものとして1・2・3・5・14・18・19・20・21が抽出される（ドッドスクリーントーン内）。このうち1には古い折れ面があり、13に見られる折れ面と同様に先の条件を満たすために折断される可能性が考えられる。数少ない例であるが、これ以外の剥片についても折れの位置、方向について注意する必要がある。 ナイフ様石器
台形様石器
ナイフ様剥片
折断の可能性

礫群について KSb-1からは総重量1,062.2gをはかる礫534点が出土した。Ⅲ章ですでにふれたようにこれらは石器の集中する部分の中心部、径2mの範囲から、すべて火熱を受けて細かく破碎した状態で出土している。接合の結果、3個は原石の形状がわかるまでに復元された。個々の大きさは8.8×6.7×3.8cm（図Ⅲ-147-55）、8.0×5.9×3.4cm（図Ⅲ-147-56）、6.9×3.8×3.4cmで、重量はそれぞれ243.7g, 199.3g, 89.0gで、残りの礫の破碎度からみて、さらに接合したとしても、おおよそ図Ⅲ-147-56程度の大きさのもの

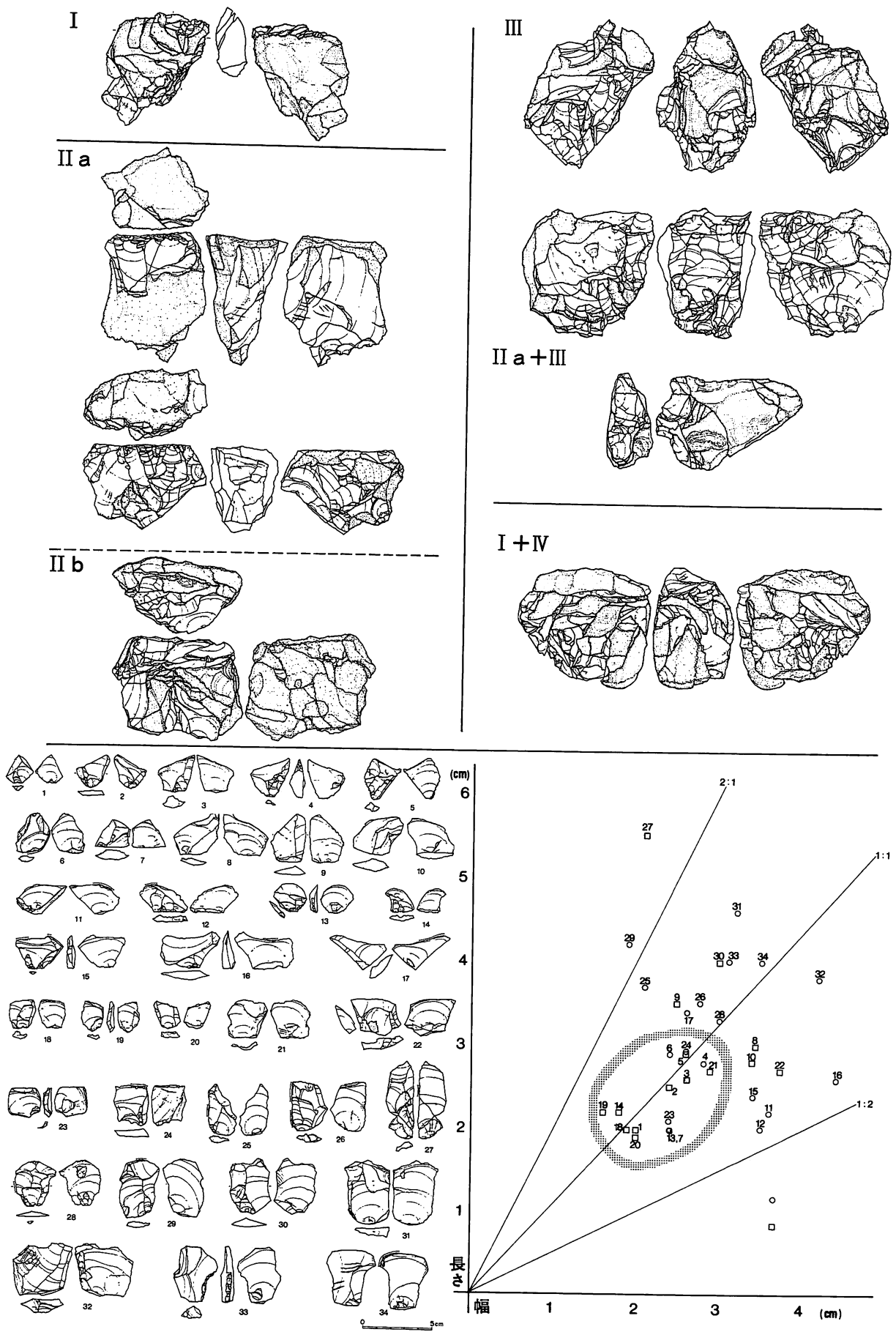


図 V-10 母岩別資料・ナイフ様石器・ナイフ様剥片集成図

5～6個が復元される程度と考えられる。表面は変色が著しいが、タール状の付着物は認められない。石材には頁岩、砂岩、安山岩があり、大きさからみても現在、遺跡東側を流れる石川の河床礫の中から採取できるもので、石器石材であるめのう質頁岩とは状況が異なる。

北海道における旧石器時代の礫群は佐藤によって5遺跡10例が整理されている（佐藤 1987）。それによると千葉の石器編年（千葉 1985b）に呼応させ年代別に「礫群Ⅰ・Ⅱ・ⅢⅠ期」に分けられるとしている。礫群Ⅰ期は勢雄遺跡C・Dブロック、上似平遺跡礫群1・2に代表されるもので、礫群の特徴として、礫が火熱をうけていること、炭化物の集中が認められることをあげ、これを調理活動の発達を示唆するものとして位置づけている。礫群Ⅱ期は情報量が少ないことから、今後の検討課題としている。礫群Ⅲ期には立川遺跡第Ⅰ地点・美利河1遺跡・上似平遺跡Aブロックがあり、礫群の規模や分布に変化がみられることから、「…調理以外にも礫群が多目的に利用されているのかもしれない。」とその特徴をまとめている。

礫群の分類

KSb-1の礫群は、被火熱礫が高比率であること、焼け礫の分布範囲が上似平遺跡礫群1の2×2m、同遺跡礫群2の2.5×2mと礫群Ⅰ期と状況が近似している。しかし、総重量をみると、上記礫群は27.54kg、6kgで本遺跡の1kgとは大きく異なり、炭化物の集中も認められないなど異なった状況もみられる。何らかの性格の違いが反映しているのかもしれない。こうした問題は母岩別資料のブロック内での動きなどとも関連させて解明する必要がある。（石川 朗）

編年的位置 発見された2カ所の石器ブロック（KSb-1, 2）は、調査区域の北端と南端に分れて確認され、さらに石器組成や石材なども大きく違い、異なった石器群と考えられる。

KSb-2は、1個体のみの出土であるが石刃がみられ、石刃技法と関連した石器群と思われるが、点数が少ないのでその内容は不明である。

石刃技法

KSb-1は、他の石器群との層位的関係や隣接する石川1遺跡の細石刃文化の石器群との接合関係などは確認できず、編年的位置付けが可能な状況証拠は得られなかった。さらに、炭化木片や黒曜石製の石器などが全く発見されず、理化学的な年代測定も行うことができなかった。また、旧石器出土部分直下のロームの分析を行い、石川1遺跡の基本層準のロームの分析と比較したところ、石川1遺跡の出土層準がローム層の上部であるのに対し、KSb-1の場合はローム層の下部に位置付けられる可能性が指摘されている（IV 2 参照）が、確定できる状況にはいたっていない。

状況証拠

年代測定

ローム分析

KSb-1の石器群には石刃技法の存在は認められず、主要な石器がナイフ様石器・剥片であるという特徴は、道内では「……祝梅三角山、鳴木、勢雄D、帯広空港南Aなどの石刃技法が存在せず切り出し形を含む祖型ナイフ形石器を特色とする石器群……」（千葉 1985）に類似した内容で、現時点では最古の石器群の一つとして位置付けられる可能性がある。しかし、これらの遺跡では接合資料が乏しく、「祖型ナイフ形石器」や剥片の形状からの剥片剥離技術にはいくつかの共通点を見ることができるとは、接合資料にもとずいた剥片剥離技術の直接的な比較は難しい。

最古の石器群

一方、東北地方に目を転じれば、秋田県においてナイフ形石器に伴う接合資料が多数報告されている（秋田県教育委員会 1984・1985）。さらに、県内で検出されている「剥片生

秋田県

米ヶ森技法 産技術」は「石刃技法・米ヶ森技法・不定形剥片技法」などがみられる（大野 1986）という。

「米ヶ森技法」（協和町教育委員会 1976・1978，藤原 1984）は，米ヶ森型台形石器の素材を連続して得るもので，剥片を素材とする石核であること，剥片剥離が石核素材の主剥離面でおこなわれること，得られる剥片の背面は常に「直前の剥離痕が形成する凹部」と「平坦な石核素材の主剥離面」で構成されるという「法則」（藤原 1984）がある点は，Ⅰ類としたもののうち，母岩別資料 6 などが関連するものとみられる。

不定形
剥片技法

「不定形剥片技法」と呼ばれているものは，「……長幅指数100前後の目的剥片を連続的に剥離しようとする意図が十分看取される剥片生産技術」で，「1つの石核において分割面などの他に新たに打面が用意されること」はなく，特徴から A～E の五種類に分けられる（大野 1986）という。A～E の特徴は以下のとおりである。

A：石核の平坦面を打面とし，打面をかえずに剥片剥離作業を行う。

B：立方体か直方体に近い石核の稜線のうち，直角に近い角度をなす稜線の両側から交互剥離状に剥片剥離を行う。

C：球か楕円球に近い石核で，打面と作業面を変えながら，石核を転がすように剥片剥離を進める。

D：盤状あるいは板状の石核の一端から連続的に剥片剥離を行う。

E：柱状の石核に打面を両設して交互に剥片剥離を行う。

詳細な検討は行っていないが，概ね本遺跡のⅡa 類，Ⅲ・Ⅳ類，Ⅲ類の一部（母岩別資料 1・5）はそれぞれ A，C，E と同様の剥片剥離技術と考えられる。

以上，KSb-1 にみられる剥片剥離技術は，秋田県内において確認されている「米ヶ森技法」と「不定形剥片技法」に関連する可能性が強いことが明らかになった。しかし，秋田県内の遺跡では両者が共存している例はなく，その状況は若干異っている。また，石器組成にも違いがみられ，単純に比較できないことも事実であるが，近縁関係にある石器群であることは間違いなさそうである。

立野ヶ原系
石器群

秋田県内の石器群の編年の位置付けや年代については，かならずしも明確になっていないが，それらは「東北地方の後期旧石器時代の中では古い一群」で，北陸地方を中心に確認され，その後汎日本的な広がりが見られる「立野ヶ原系石器群」と類似点があることが指摘されている（麻柄 1986）。

立野ヶ原系
石器群
最古の石器群

従って，本遺跡の KSb-1 の石器群は，秋田県内で確認されている剥片剥離技術を介して汎日本的な「立野ヶ原系石器群」と関連性をもっていることが考えられる。さらに，これらの状況は，前述した現時点での北海道最古の石器群の全国的な位置付けへ発展する問題も含んでいる。そのような意味で，本遺跡の KSb-1 の石器群は本州と北海道の細石刃以前の石器群における間隙を埋める重要な鍵を握っているものといえ，今後も詳細な検討を行っていきたいと考えている。

（石川 朗，長沼 孝）

引用・参考文献

- アイヌ民族博物館 1987 『ソビエト連邦極東少数民族展』(助白老民族文化伝承保存財団)
- 秋田県教育委員会 1984 『此掛沢Ⅱ遺跡・上の山Ⅱ遺跡』発掘調査報告書 秋田県文化財調査報告書 第114集
- 秋田県教育委員会 1985 『七曲台遺跡群』発掘調査報告書 秋田県文化財調査報告書125集
- 伊藤初太郎 1935 『考古学上の根室の遺物と遺跡』
- 宇田川 洋 1979 「北海道縄文時代中期の住居址」『茅沼遺跡群』一釧路川中流域の遺跡一
- 江坂輝弥 1974 「動物形土製品」『古代史発掘』3 土偶芸術と信仰 講談社
- 大塚和義 1968 「オホーツク文化の偶像・動物意匠遺物」『物質文化』11 物質文化研究会
- 大沼忠春 1981a 「道央部の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第17輯
- 大沼忠春 1981b 「北海道中央部における縄文時代中期から後期初頭の編年について」『考古学雑誌』第66巻第4号
- 大沼忠春 1984 「道南の縄文前期土器群の編年について」『北海道考古学』第20輯
- 大沼忠春 1986 「道南の縄文前期土器群の編年について(Ⅱ)」『北海道考古学』第22輯
- 大野憲司 1986 「秋田県の旧石器時代における剥片生産技術について」北陸旧石器シンポジウム 1986
『日本海地域における旧石器時代の東西交流』発表要旨 北陸旧石器文化研究会, 近畿旧石器交流会
- 大場利夫・大井晴男編 1981 『香深井遺跡』下 オホーツク文化の研究3 東京大学出版会
- 岡田淳子・楳田光明・西谷栄治ほか 1978 『亦稚貝塚』利尻町教育委員会
- 粕谷俊雄 1980a 「イルカの生活史」『月刊アニマ』No.90 平凡社
- 粕谷俊雄 1980b 「日本近海のイルカの識別法」『月刊アニマ』No.90 平凡社
- 加藤九祚 1986 『北東アジア民族学史の研究』恒文社
- 金子浩昌・忍沢成視 1986 『骨角器の研究』縄文篇Ⅰ 慶友社
- 北構保男・須貝 洋 1953 「北海道根室半島・トーサムポロ・オホーツク式遺跡調査報告」『上代文化』第24号 国学院大学考古学会
- 協和町教育委員会 1976 『米ヶ森遺跡発掘調査略報』
- 協和町教育委員会 1978 『米ヶ森遺跡発掘調査報告書』
- 児玉作左衛門ほか 1958 『サイベ沢遺跡』一函館郊外桔梗村サイベ沢遺跡発掘報告書
- 佐藤訓敏 1987 「結語」『帯広・上似平遺跡2』帯広市埋蔵文化財調査報告第6冊
- 鈴木忠司 1985 「再論日本細石刃文化の地理的背景」『日本原史』吉川弘文館
- 鈴木 守・長谷川潔・三谷勝利 1969 5万分の1地質図幅「東海」北海道開発庁
- 瀬川秀良 1974 日本地形誌北海道地方 303pp. 朝倉書店
- 瀬川秀良 1975 「西桔梗遺跡と段丘形成について」千代 肇編『西桔梗』(再版)583pp. 函館市文化財保護協会 pp.24-32
- 高倉新一郎 1969 「イナウ」『アイヌ民族誌』アイヌ文化保存対策協議会
- 高橋正勝 1974 「日ノ浜型住居跡」『北海道考古学』第10輯
- 高橋正勝 1981 「北海道南部の土器」『縄文文化の研究』第4巻 縄文土器Ⅱ 雄山閣
- 高橋正勝 1972a 「北海道における縄文時代中期の終末(1)」『北海道青年人類科学研究会会誌 No.9』
- 高橋正勝 1972b 「北海道における縄文時代中期の終末(2)」『北海道青年人類科学研究会会誌 No.10』
- 千歳市教育委員会 1974 「祝梅三角山地点」一北海道千歳市祝梅における旧石器時代遺跡の発掘調査
- 千葉英一 1985a 「日本の旧石器ー第1回ー北海道(1)」『月刊考古学ジャーナル』No.245 ニューサイエンス社
- 千葉英一 1985b 「日本の旧石器ー第3回ー北海道(3)」『月刊考古学ジャーナル』No.249 ニューサイエンス社
- 知里真志保 1954 「ユーカラの人々とその生活」『歴史家』第3号(『知里真志保著作集』3所収)
- 坪井正五郎 1908 「カラフト石器代遺跡発見の鳥骨管」『東京人類学会雑誌』第23巻第263号
- 土肥 孝 1981 「動物の土偶と狩猟祭祀」『月刊アニマ』No.96 平凡社
- 土肥 孝 1985 「儀礼と動物」『季刊考古学』第11号 雄山閣
- 名取武光 1936 『北日本に於ける動物意匠遺物と其の分布相』北大博物館報告(『アイヌと考古学』(-)名取武光著作集Ⅰ所収)
- 日本貨幣商協同組合 1987 『日本貨幣型録』
- 西本豊弘 1984 「北海道の縄文・続縄文文化の狩猟と漁撈」『国立歴史民俗博物館研究報告』第4集 国立歴史民俗博物館

- 史民族博物館
- 西本豊弘 1985 「北海道の狩猟・漁撈活動の変遷」『国立歴史民俗博物館研究報告』第6集 国立歴史民族博物館
- 萩中美枝 1980 『アイヌ文学ユーカラへの招待』北海道出版企画センター
- 函館市教育委員会 1981 『権現台遺跡発掘調査報告書』
- 函館市教育委員会 1979 『見晴町 B 遺跡発掘調査報告書』
- 函館市教育委員会 1985 『サイベ沢遺跡』
- 函館市教育委員会 1986 『サイベ沢遺跡Ⅱ』
- 函館市文化財保護協会 1975 『西桔梗』—函館圏流通センター建設用地内遺跡調査報告書
- 橋本 正 1976 『竪穴住居の分類と系譜』『考古学研究』第23巻3号
- 長谷川潔・鈴木 守 1964 5万分の1地質図幅「五稜郭」北海道立地下資源調査所
- K.バルカム 1986 『力を合わせる殺し屋たち—シャチの捕食戦略』『動物大百科』2 海生哺乳類 平凡社
- 藤原妃敏 1984 「米ヶ森技法」『月刊考古学ジャーナル』No.229 ニュー・サイエンス社
- 北海道開拓記念館 1972 『北方民族展資料目録』
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1984a 『今金町美利河1遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第23集
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1984b 『湯の里遺跡群』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第18集
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1986 『建川1・新道4遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第33集
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1987 『建川2・新道4遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第43集
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1988a 『函館市石川1遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第45集
- （財）北海道埋蔵文化財センター 1988b 『新道4遺跡』（財）北海道埋蔵文化財センター調査報告 第52集
- 麻柄一志 1986 「立野ヶ原型ナイフ形石器及び立野ヶ原系石器群について」北陸旧石器シンポジウム1986
『日本海地域における旧石器時代の東西交流』発表要旨 北陸旧石器文化研究会、近畿旧石器交流会
- 松下 亘 1968 「北海道とその隣接地域の動物意匠遺物について」『北海道考古学』第4輯 北海道考古学会
- 三谷勝利・小山内照・松下勝秀・鈴木 守 1965 5万分の1地質図幅「函館」北海道立地下資源調査所
- 三谷勝利・鈴木 守・松下勝秀・国府谷盛明 1966 5万分の1地質図幅「大沼公園」北海道立地下資源調査所
- 村越 潔 1974 『円筒土器文化』考古学選書10 雄山閣
- 森田知忠・高橋正勝 1967 『サイベ沢 B 遺跡調査報告』市立函館博物館、亀田町教育委員会
- 八幡一郎 1943 「骨製針入」『古代文化』第14巻8号（『八幡一郎著作集』第四巻所収）
- 米村喜男衛 1961 『北海道紋別郡湧別町川西遺跡』網走郷土博物館シリーズ1（『北方郷土・民族誌』3所収）